第１章

研究の計画

第１節

今期研究（第 16 期研究）の計画

1　研究テーマ

「児童生徒の確かな学びをつなぐカリキュラム・マネジメントの確立を目指してⅡ」
－佐大附特システムの改善と授業実践を通して－

2　テーマ設定の理由

(1)　これまでの研究の経緯と課題から

「教育実践の成果は，児童生徒の学校卒業後の生活の在りように表れる」という思いのもと，本校では児童生徒の実態や特性に応じ，また社会情勢や教育施策を踏まえ，よりよい教育支援の在り方を求め，これまで 15 期約 40 年間にわたって，実践研究に取り組んできた。前々期第 14 期研究では，「児童生徒の思いを育む授業づくり－授業に生かす学習評価の在り方をさぐる－」というテーマで学習評価の在り方について研究を行い，前期第 15 期研究（以下「前期研究」とする）では，テーマを「児童生徒の確かな学びをつなぐカリキュラム・マネジメントの確立を目指して－明日の授業につながる佐大附特システムの構築－」として，カリキュラム・マネジメントについて研究を進めてきた。

前期研究では，本校がカリキュラム・マネジメントを推進するための方式や枠組みとして位置付けた「佐大附特システム」の構築に取り組んだ。まず，本校のカリキュラム・マネジメントの全体像を表すカリキュラム・マネジメント構造図と，カリキュラム・マネジメントフロー図を作成した。次に，年間指導計画，単元計画及び評価，指導案や指導略案といった，カリキュラム・マネジメントに係る各計画の様式や記入の仕方について検討し，学部間の連携もねらいながら，小学部・中学部・高等部で統一した様式の作成に取り組んだ。構造図とフロー図の作成の取組を通して，本校が今後取り組んでいくカリキュラム・マネジメントの基本的な考え方や指針について，教師の理解を深めることができた。このような基本的な考え方等の共通理解を基に，カリキュラム・マネジメントに係る各計画を用いて，年間のスパンから日々のスパンで教育(指導)計画を作成し，それに沿った実践を進め，評価するという取組を行った。

以上のように，前期研究では，カリキュラム・マネジメントを確立するための土台となるシステムの構築を図ることができた。しかし，本校におけるカリキュラム・マネジメントの実践は始まったばかりであり，この取組が児童生徒の生きる力の育成に有効であるか，構造図やフロー図に基づいて取り組むことは，本校のカリキュラム・マネジメントの確立に向けて妥当であるかについての検証など，取り組むべき課題が既に見えてきていた。また，カリキュラム・マネジメントの実践に取り組み始めたところ，実際に運用することの難しさが見え始め，その改善策を早急に講じることも必要となった。

そこで今期は，前期からの継続研究として，まず日々のカリキュラム・マネジメントの運用をスムーズに進めるためのシステム改善に取り組むべきであると考えた。また，年間指導計画，単元計画及び評価，指導略案等についても，各計画作成や評価の取組が継

続しやすいように様式や活用方法をさらに検討する中で，計画案相互の関係の整理や評価を踏まえた授業改善の手続きを明確にするとともに，カリキュラム・マネジメントを行う目的や意義を再確認できるよう取り組みたいと考えた。

(2)　本校の実情から

本校は大学附属の知的障害特別支援学校で，全校児童生徒数 55 名（令和 3 年度）という小規模の学校である。知的障害の程度は様々で，自閉スペクトラム症等の発達障害のある児童生徒もかなりの割合を占めており，実態の差は大きいが，教育課程は各学部単一の類型となっている。様々な実態の児童生徒で構成される集団での授業・学習が展開されるが，その中で，一人ひとりの実態に応じた教材教具を準備するなど，個別の手立てを行うことによって対応しているところである。国語・算数(数学)の授業において，小学部では個別学習を中心に行い，中学部や高等部では学年の枠を外して習熟度別にグルーピングして授業を行う等の工夫も行っている。

こうした実情を踏まえ，さらに一人ひとりの学びを確かなものにし，学びをつないでいくためには，対話的な学習の充実など集団で学ぶよさを生かしながら，その授業におけるねらいを押さえた上で，個に応じた目標設定や適切な評価を行うことが大切になってくる。

本校でも，「教育計画における目標設定（Plan）→授業実践（Do）→評価（Check）→授業改善（Action）」の PDCA サイクルの手順をベースに授業作りに取り組んできたが，前期研究からは，児童生徒一人ひとりに育成すべき資質・能力は何か，そのためにどんな学習を用意するか，その学習内容を授業として適切に展開できたか，資質・能力が育成されたか，次に育成すべき資質・能力は何か，という児童生徒一人ひとりの学びに着目した取組を行ってきた。

児童生徒一人ひとりの学びを多様性のある集団の中で保障し，本校の教育活動を充実させるためには，カリキュラム・マネジメントの確立を目指すことが必要不可欠であることが確認できたため，前期から引き続き今期も「カリキュラム・マネジメント」をテーマに設定し，研究を深めたいと考えた。

(3)　教師の資質向上の視点から

これまで本校は理論研究を踏まえながらも，授業研究や事例研究を中心として研究に取り組んできた。私たち教師の授業力や指導力向上を土台とし，児童生徒のよりよい教育支援の在り方を探るという，開校以来，本校研究の一貫した考え方を受け継いできている。

前期研究においても，「佐大附特システム」に沿ってカリキュラム・マネジメントの視点をベースとした授業研究に取り組んだ。その中で，各教科等を合わせた指導において，各教科等の目標や内容を明確にした授業作りの在り方や，目標設定から評価及び評価の生かし方について検討を深めることができた。次の段階として，本校教育全般にわ

たって，前期研究の成果を日々の授業作りや指導・支援に生かせるよう，学びと学びを関連付けながら教育計画を行うことや，教師間の協働をさらに充実させることが求められる。

また，今期研究では，サブテーマに「授業実践を通して」という文言を入れている。授業実践を通して，「児童生徒の確かな学びをつなぐ」ために大切なことを明らかにし，ポイントとして整理していきたいと考える。整理したポイントを教師間で共有し，児童生徒の生きる力の育成に向けた年間指導計画作成，単元構想や日々の授業作り等に生かしたいと考えた。

3　研究目的

「佐大附特システム」の改善を通して，本校のカリキュラム・マネジメントを推進し，児童生徒一人ひとりの確かな学びをつなぐ指導・支援の在り方を探る。

4　研究内容

(1)　「佐大附特システム」の改善

(2)　「学習内容表」の作成と活用

(3)　児童生徒の確かな学びをつなぐ授業実践

5　研究方法

(1)　「佐大附特システム」の改善

ア　本校のカリキュラム・マネジメントの推進に関する課題の整理を行う。

イ　カリキュラム・マネジメントに係る各計画の様式等の見直し及び活用の状況をまとめる。

ウ　カリキュラム・マネジメント構造図，カリキュラム・マネジメントフロー図の見直しを行う。

(2)　「学習内容表」の作成と活用

ア　「学習内容表」作成に取り組む。

イ　「学習内容表」の活用の状況をまとめる。

ウ　「学習内容表」の作成後や活用後にアンケートを取り分析する。

(3)　児童生徒の確かな学びをつなぐ授業実践

ア　「佐大附特システム」に基づいた学部別授業研究を各年次で行う。

イ　授業研究から明らかになった「児童生徒の確かな学びをつなぐポイント」をまとめる。

６　研究計画

研究計画は，以下のように計画を立てて，取り組んだ。

<table>
<tr><th>月</th><th>令和２年度</th><th>令和３年度</th></tr>
<tr><td>４月</td><td rowspan="2">今期研究の計画</td><td rowspan="2">学習内容表の作成（音楽，図画工作・美術，体育・保健体育）</td></tr>
<tr><td>５月</td></tr>
<tr><td>６月</td><td rowspan="2">「学習内容表」の作成（国語，算数・数学，生活，職業・家庭，職業，家庭，理科，社会）</td><td rowspan="2">学部別授業研究</td></tr>
<tr><td>７月</td></tr>
<tr><td>８月</td><td>第１回全体研究会
「学習内容表」作成の取組のまとめ</td><td>第１回全体研究会
学習内容表作成の取組のまとめ</td></tr>
<tr><td>９月</td><td rowspan="3">学部別授業研究</td><td>学部別授業研究</td></tr>
<tr><td>10 月</td><td>研究紀要作成</td></tr>
<tr><td>11 月</td><td rowspan="2">研究発表会準備</td></tr>
<tr><td>12 月</td><td>第２回全体研究会
学部別授業研究のまとめ</td></tr>
<tr><td>１月</td><td rowspan="2">令和３年度年間指導計画（案）作成</td><td>第 20 回研究発表会
（全体研究発表，学部別分科会，講演会）</td></tr>
<tr><td>２月</td><td>令和４年度年間指導計画（案）作成</td></tr>
<tr><td>３月</td><td>第３回全体研究会
１年次研究のまとめ</td><td>第２回全体研究会
今期研究のまとめ</td></tr>
</table>

第２節

カリキュラム・マネジメントを
推進する「佐大附特システム」の概要

1　「佐大附特システム」の構築

平成 29～31 年改訂の新学習指導要領で示された，「各学校においては，児童又は生徒や学校，地域の実態を適切に把握し，教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと，教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと，教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して，教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと（カリキュラム・マネジメント)」という提言を踏まえ，本校では平成 30 年度から令和元年度にかけて，「児童生徒の確かな学びをつなぐカリキュラム・マネジメントの確立を目指して－明日の授業につながる佐大附特システムの構築－」というテーマで前期研究に取り組んだ。前期研究では，「カリキュラム・マネジメントを推進し，児童生徒の確かな学びをつなぐ授業実践を行う」を研究の目的として，「佐大附特システム」の構築と，「佐大附特システム」に基づいた授業研究に取り組んだ。

(1)　本校におけるカリキュラム・マネジメントの捉えの整理

まず，カリキュラム・マネジメントについて教師間の共通理解を図るために，用語の捉えについて整理を行った。また，実際にカリキュラム・マネジメントを推進していくための本校のシステム作りに取り組むこととした。

ア　本校における「カリキュラム・マネジメント」の位置付け

本校における「カリキュラム・マネジメント」とは，「本校児童生徒の豊かな社会生活への移行を目指し，入学から卒業まで確かな学びをつないでいくことができるよう，佐大附特システムに沿って教育課程をはじめとする教育計画において，指導内容や指導方法を，計画的・組織的に編成，実施，評価，改善していくこと」とした。

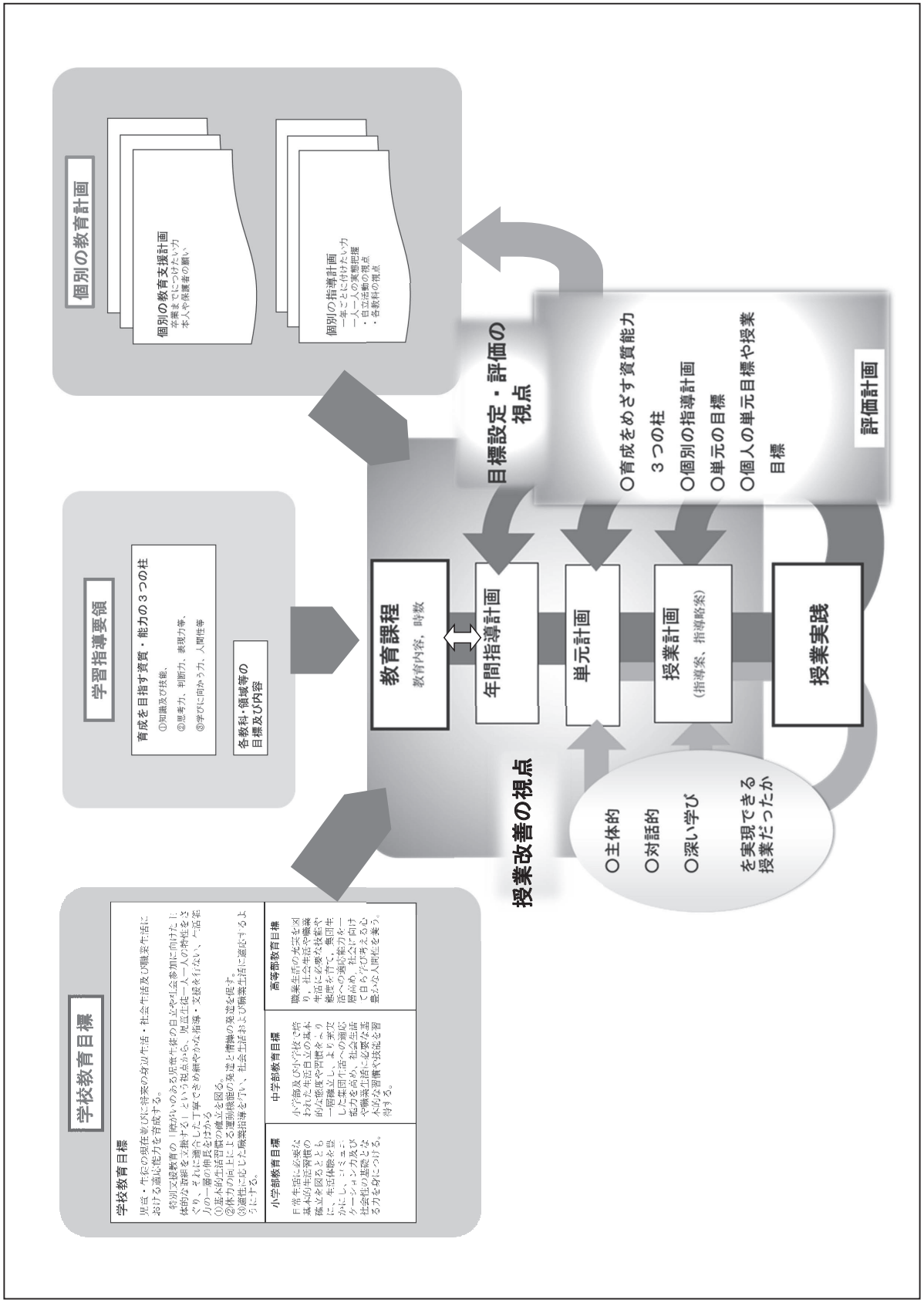
イ　「佐大附特システム」の概要

本校におけるカリキュラム・マネジメントを進めていく際の枠組みや方式のことを「佐大附特システム」と名付け，「カリキュラム・マネジメント構造図」，「カリキュラム・マネジメントフロー図」，「カリキュラム・マネジメントに係る各計画」によって構成することとした。

(2)　佐大附特システムの構築

(1)の整理を受け，カリキュラム・マネジメントの捉えを教師間で共通理解した上で，佐大附特システムの「カリキュラム・マネジメント構造図」及び「カリキュラム・マネジメントフロー図」の作成に取り組んだ。また，カリキュラム・マネジメントを教師が実施するということは，「教育計画→授業実践→評価→改善」を積み重ねていくことであるので，そのために必要な各計画の様式（年間指導計画，単元計画及び評価，指導案，指導略案）の作成に取り組んだ。

ア　カリキュラム・マネジメント構造図〔図－1〕の作成



〔図－1　カリキュラム・マネジメント構造図〕

カリキュラム・マネジメントの理解を深め，実際に推進していくための指標となるよう，概要の図式化に取り組むこととした。カリキュラム・マネジメントに関わる要素を洗い出し，各要素の関連性に基づいて配置し図を作成した。

まず，構造図の中心に教育計画を位置づけ「教育課程-年間指導計画-単元計画-授業計画」の流れで表した。次に教育計画と授業実践と評価をサイクルとして示すようにした。評価は「目標設定・評価」の視点と「授業改善」の視点の２つで示した。「目標設定・評価」の視点における評価については，次の授業，他の単元，年間指導計画，個別の指導計画に反映させるものと考え，「授業改善」の視点における評価については，次の授業や単元の進め方に反映させるものとした。

イ　カリキュラム・マネジメントフロー図〔図－2〕の作成

カリキュラム・マネジメントを実際に推進していくためには，まず，私たち教師の行動計画を作成する必要があると考えた。カリキュラム・マネジメントフロー図とは，本校のカリキュラム・マネジメントに係る取り組みについて，「だれが」「いつ」「何をするか」年間を通して表したものである。

〔図－2　カリキュラム・マネジメントフロー図〕

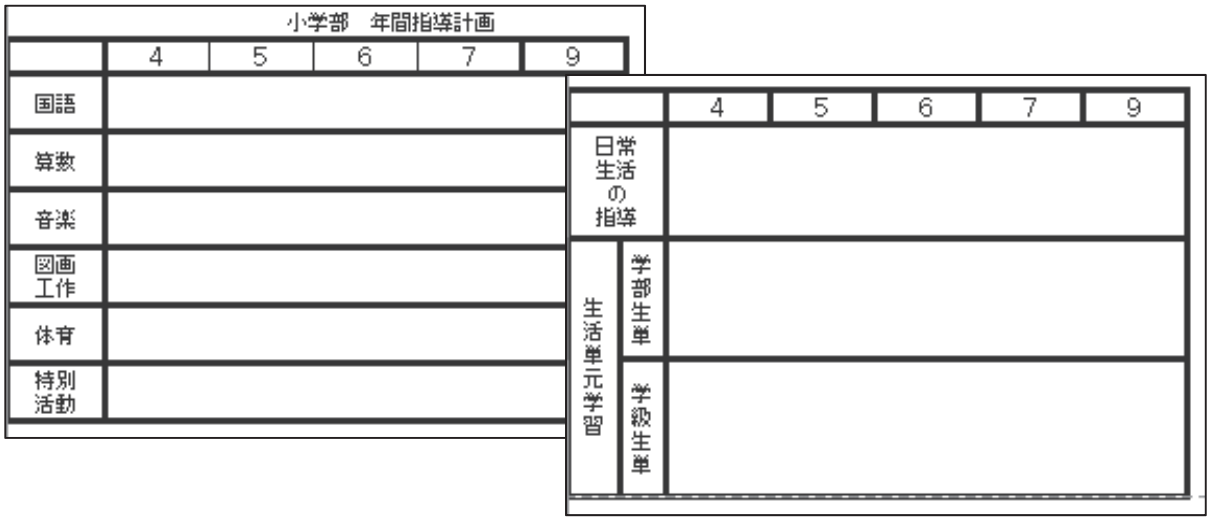
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
学校教育目標	学校教育目標について検討【校長】		全職員に提示【校長】									
教育課程	次年度教育課程学部原案作成【主事】 学部会『次年度教育課程学部案検討』 教育課程検討委員会①『次年度教育課程案検討・決定』			教科書の選定		前期授業実施時数の確認【主事】	分析		教育課程検討委員会②『次年度教育課程検討・決定』	学部会『次次年度教育課程の検討』		後期授業実施時数及び年間授業実施時数の確認
個別の教育支援計画	小１・４ 中１ 高１ 支援計画新規作成【担任】→【教務】→【ＣＯ】		支援会議打合せ	支援会議【担任団】						教育支援計画の評価【担任】→【ＣＯ】→【主事】→【教務】→【管理職】		
	小２・３・５・６ 中２・３ 高２・３ 昨年度作成した計画の見直し【担任】		加筆・修正【担任】							教育支援計画の評価【担任】→【ＣＯ】→【主事】→【教務】→【管理職】		
個別の指導計画	実態把握，年間目標【担任】		実態把握，年間目標，前期目標作成【担任→主事→教務→管理職】			前期評価【担任→主事→教務→管理職】	後期目標作成【担任→主事→教務→管理職】				後期評価【担任→主事→教務→管理職】	実態把握修正 次年度年間目標設定
年間指導計画	昨年度作成した年間指導計画の運用【担任・副担任・授業担当者】 今年度の年間指導計画の見直し①（時数・内容）【担任・副担任・授業担当者】→学部会			今年度の年間指導計画の見直し②（前期の評価・後期の見直し）【担任・副担任・授業担当者】→学部会 ※今年度は学部研でも扱う						今年度年間指導計画の評価 次年度年間指導計画の作成【担任・副担任・授業担当者】→学部会 ※今年度は学部研でも扱う		
単元計画	４～6月の単元評価の整理【担任・副担任・級外】 単元評価①			７～９月の単元評価の整理【担任・副担任・級外】 単元評価②			１０～１２月の単元評価の整理【担任・副担任・級外】 単元評価③			１～３月の単元評価の整理【担任・副担任・級外】 単元評価④		
授業計画	随時授業計画・実施・評価を行う											
保護者との連携	保護者会『年間スケジュール確認』【主事】		個人面談・家庭訪問『教育支援計画・指導計画目標確認』【担任】			保護者会『前期の学習活動の振り返りと後期の学習活動のお知らせ』【主事】通知表				個人面談『１月までの学習の様子について，教育支援計画の評価』【担任】		保護者会『次年度に向けて』【主事】通知表

ウ　カリキュラム・マネジメントに係る各計画の様式

本校では，これまでも年間指導計画や，単元の計画等の教育計画を作成してきたが，長年，学部ごとに研究を進めてきたという経緯から，それぞれの学部独自の様式となっており，記入の仕方等も異なっていた。小学部・中学部・高等部の一貫性の観点から，また，研究テーマにもある「児童生徒の確かな学びをつなぐ」を実現するためにも，全学部統一した様式や記入方法の検討が必要であると考えた。カリキュラム・マネジメント構造図にも示した「教育課程－年間指導計画－単元計画－授業計画」の教育計画のうち，年間指導計画，単元計画及び評価，授業計画（指導案，指導略案）を「カリキュラム・マネジメントに係る各計画」とし，前期研究では，その様式等の検討を行った。

(7)　年間指導計画〔図－3〕

年間指導計画については，「本校の教育活動の実質的な内容を１年間の一覧表として示すこと」，「教師が年間の見通しを持って指導にあたることができること」，「児童生徒がどんな学習を積んできたかを知ることができること」をねらって作成した。様式は，学年ごとに表し，横に各月，縦に各教科と指導形態の半期１ページの２枚組とした。



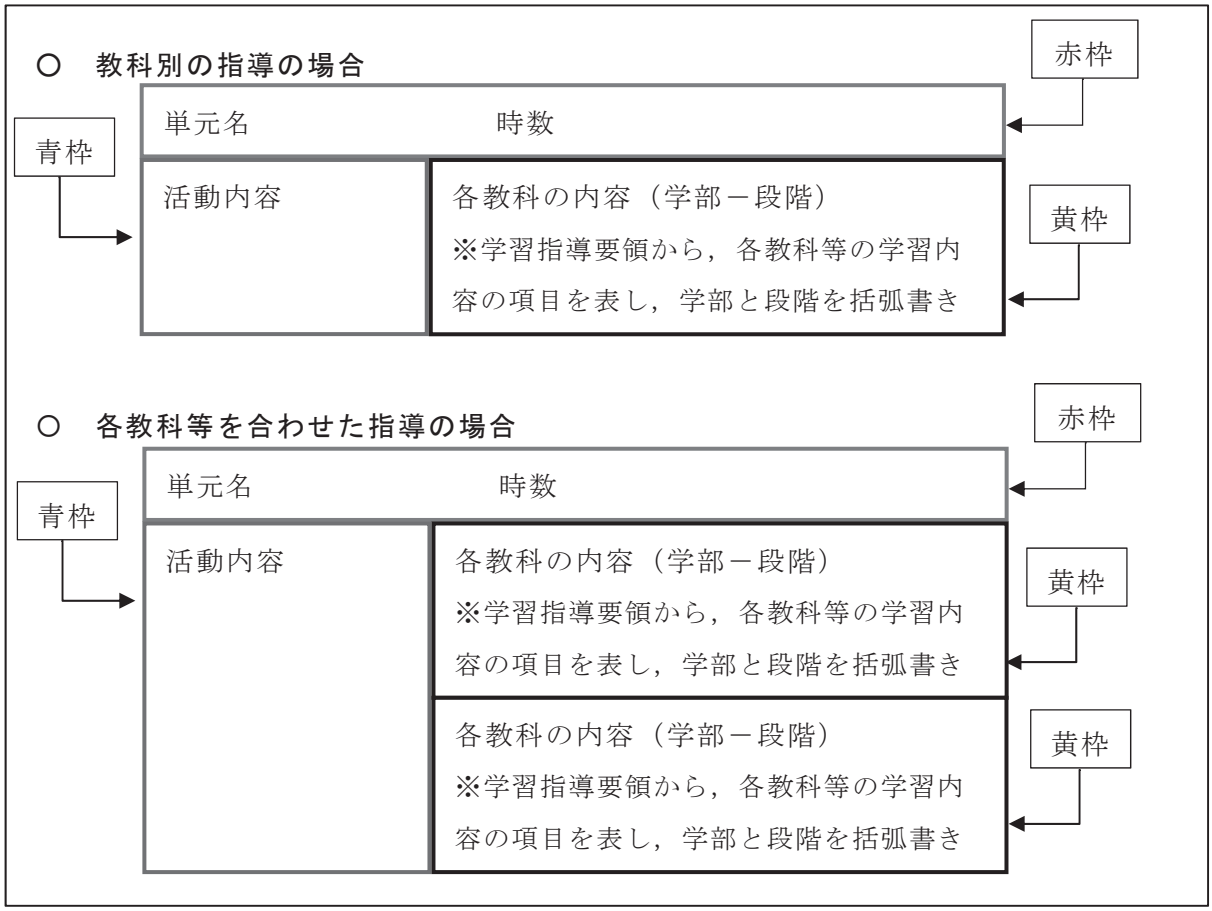
〔図－3　年間指導計画様式(小学部)〕

年間指導計画の記入の仕方〔図－4〕についても，検討を行った。年間指導計画の様式に，その時期に行う単元を配置するようにした。１つの単元について「単元名」「活動内容」「指導内容」の３つをセットにしてテキスト挿入の形式で記入することとした。

教科別の指導の場合は，「単元名と時数の枠（赤)」「活動内容の枠（青)」「学習指導要領の各教科等の内容の枠（黄／学部・段階は括弧書き)」にそれぞれ記入することとした。

各教科等を合わせた指導の場合は，教科別の指導と同様に記入することとしたが，「学習指導要領の各教科等の内容の枠（学部・段階は括弧書き）」については，合わせて指導している複数の教科等を枠内に記入するようにした。

このような表し方をすることで，教師が学習指導要領で示されている各教科の内容を意識しながら単元を展開することができているかを確認し，年間指導計画を見ることで，単元の配列・教科等の内容の取扱いに偏りがないか，改めて意識できるようになった。



〔図－4　年間指導計の表記の仕方〕

(ｲ)　単元計画及び評価〔図－5〕

単元のねらいや学習活動の計画等をまとめた単元計画及び評価の様式についても整理した。

この様式では，「児童生徒一人ひとりにどんな力を身に付けるのか。」という育成を目指す資質・能力を個人目標として設定・記入できるようにした。個人目標を設定する際には，各教科等名と学部・段階を示し，より一人ひとりに応じた目標設定を行うようにした。目標が明確になることで，各授業において特別支援教育の本質とも言える個に応じた指導・支援を行うことができるようになった。

評価については，児童生徒の個人目標に対する評価と，単元が適切であったかどうか等の単元設定に対する評価を行うこととした。

個人目標に対する評価については，達成されたかどうかという視点に加え，「今後に向けて」の項目を追加し，目標が達成できた場合は，次の単元にどのようにつなげていくのか，他の学習とどのように関連させていくのか，達成されなかった場合は，なぜ個人目標が達成されなかったのか，どのような指導の工夫を行えば達成されるのかなどを考察していくこととした。

単元設定に対する評価については，単元が，各教科等で育成すべき資質・能力を身に付けるために妥当であったかという視点がもてるよう項目を設定した。単元設定の評価を，年間指導計画の評価につなげることで，例年どおりの踏襲で同じ単元を漫然と繰り返すのではなく，児童生徒の実態を踏まえ，教師が創意工夫して単元を設定することができるようになると考えた。

○学部　○○学習（科）単元計画及び評価

期間
場所
対象
指導者

1. 単元（題材）名「　　」

2. 単元（題材）のねらい

・

・

この単元を通してねらう児童生徒の姿を記載する。

3. 単元（題材）の計画（全○時間）

次	時	日時	学習活動	指導内容（学習指導要領から）

それぞれの活動で取り扱う各教科等の指導内容を学習指導要領から抜粋する。教科別の指導では，段階を括弧書きし，各教科等を合わせた指導においては，各教科等名と段階を括弧書きする。

4. 単元（題材）の個人目標（各教科・領域等）

児童（生徒）	個人目標
○○　○○	①　　（各教科等名・学部・段階）
○	

児童生徒一人一人の，この単元を通して育成する資質・能力を個人目標として設定する。各教科等を合わせた指導においては，教科ごとに設定する。

5. 各次，各時の詳細

各次，各時の詳細については，各担当が使用しやすい指導略案で作成する。

【単元（題材）を終了しての評価】

(1) 単元の個人目標の評価

	目標	評価	今後に向けて
○○	①　　（各教科等名・学部・段階）		
○○	②		

「今後に向けて」については，目標達成できた場合は，次の単元では，どんな資質・能力の育成をめざすか，他の学習とどのように関連させていくのかについて記入する。目標達成できなかった場合は，その要因や改善策に関する事項を記入する。

評価○，△　　【評価は 2 段階】

(2) 単元についての評価

①単元目標にあげた個人目標を達成するために，さらに有効と考えられる単元内容は他に考えられるか。

②この単元についての諸条件（指導形態，学習グループ，時期，学習の場，授業時数等）について工夫できる点はないか。

個人目標として示された，目指す資質・能力の育成に有効な単元であったかを検討し，記入する。学習内容の工夫等も記入する。

〔図－5　単元計画及び評価〕

(ｳ)　指導案〔図－6〕

研究授業等で作成する指導案の様式については，基本的には「単元計画及び評価」に「本時の学習」の記述を加えるものとした。その中でも，児童生徒一人ひとりが単元全体を通して，育成を目指す資質・能力の 3 つの柱＝ア「知識・技能」の習得・イ「思考力・判断力・表現力」の育成・ウ「学びに向かう力・人間性等」の涵養）をバランスよく習得できるようにという考えのもと，本時で特に何を重点的

に目指すのかが分かるよう，3つの柱を記号で記入するようにした。

また，本時後には，本時の個人目標の評価だけではなく，「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業であったかという，授業改善の視点で授業自体の評価を行う項目を設定した。

6. 本時の学習

(1)本時の目標

①

②

各教科等から目標があがる。合わせた指導の場合，目標の後に（教科等名）を入れる。

(2)児童（生徒）の目標

児童（生徒）	個人目標	3つの柱
○○　○○	①（合わせた指導の場合は，各教科等名・学部・段階） （各教科の指導の場合は，学部段階）	
	②	
○○　○○	①	
	②	

単元中に育成を目指す3つの柱をバランスよく達成することを前提として指導に当たるが，本時はどれにあたるかを意識するために記号を書き入れる。

育成を目指す資質・能力の3つの柱

ア　何を理解しているのか，何ができるか（「知識・技能」の習得）

イ　理解していること・できることをどう使うか（「思考力・判断力・表現力」の育成）

ウ　どのように社会・世界と関わり，よりよい人生を送るか（「学びに向かう力・人間性等」の涵養）

(3)展開

時間	学習活動	指導・支援	
		T1	T2・T3

7. 場の設定

8. 評価

(1) 児童（生徒）の評価

	目標	評価	次回に向けて
○○	①　（各教科等名・学部・段階）		
	②		

「次回に向けて」では，本時の目標達成できなかった場合はその改善策を，達成できた場合は，単元の個人目標に向けて次時で取り組みたいこと等を記入する。

評価○，△　　【評価は，2段階】

（2）授業改善に向けて

	気づき・次回への工夫
主体的 児童生徒が主体的に学ぶための工夫	学習指導要領に示された「授業改善の視点」に沿って，本時の振り返りを行う。授業は児童生徒の資質・能力を育成することを目的として行われている。その資質・能力を育成するために，次の授業に向けて改善を図るようにする。
対話的 児童生徒が他者とかかわりながら学ぶための工夫	
深い学び 児童生徒が考えたり試行錯誤したりしながら学ぶための工夫	

〔図－6　指導案〕

エ　カリキュラム・マネジメントの各段階における計画作成及び評価に係る検討会

カリキュラム・マネジメントの各段階における計画作成及び評価を行うにあたっては，それぞれ教師間で検討し，共通理解を図ることとした。単元計画及び評価や日々の授業計画については，T1 を中心に日々進められたところだったが，年間指導計画の年度末の評価や，それを基にした次年度の年間指導計画の作成については，全校で一斉に取り組むこととし，以下のように進めていった。

①　研究1年次の各学級・学部の授業の取組の評価（1月下旬）

各教科等の授業や，各教科等を合わせた指導のそれぞれの単元について，各担任や学習グループ担当等で話し合って評価を行った。単元ごとの目標(各教科等)が達成されたか，その単元が目標を達成するのに適した単元だったか，他の課題(学習グループ，単元期間，活動内容等)はなかったか。」などの視点をもって評価を行った。

↓

②　個別の指導計画の評価，次年度の個別の指導計画の年間目標の検討（2月上旬）

教育計画が適切であったか，適切な授業実践ができたかは，児童生徒につけたい力を育むことができたかで評価される。そこで，個別の指導計画の後期評価及び次年度の年間目標(案)を検討し，個別の指導計画の評価や次年度の目標等を押さえた上で，次年度の年間指導計画を作成することとした。児童生徒一人ひとりの目標達成に向けて，どの単元のどの授業の取り組むかについて検討することで，個別の指導計画と年間指導計画がよりつながりのあるものになった。

↓

③　次年度の年間指導計画の作成（2月中旬・下旬）

①，②を受けて，次年度の年間指導計画を作成した。学年で話し合うだけでなく，学部間・学年間のつながりの強化も図るために，担任と次の学年の担任や，その児童生徒と関わってきた教師等とで話し合いの場を設定した。例えば，新中学部1年生の年間指導計画の作成を行う場合，小学部6年担任と中学部教師とで話し合い，情報交換を行いながら年間指導計画の作成につなげた。同様に，新高等部1年生の年間指導計画の作成を行う場合も，中学部3年生担任と高等部教師とで話し合い，次年度の年間指導計画の作成を行った。このようなメンバーで検討することで，児童生徒の実態を踏まえつつ，次の学部や学年（生活年齢）として必要な学びも視野に入れた年間指導計画を作成することができた。

以上のように，前期研究では，「佐大附特システム」の構築に取り組み，フロー図に沿った実践を積み重ねてきた。今期第 16 期研究では，この前期研究の課題の整理から取り組むこととした。